

# 学術俯瞰講義

## 死すべきものとしての人間(2)

2009.4.27.



ボッカッチョの「死」の物語『デカメロン』  
—中世ヨーロッパの死生観として—

総合文化研究科・村松真理子

# Giovanni Boccaccio (Certaldo 1303- Firenze 1375)



Anonimo, *Ritratto di Giovanni Boccaccio*, miniatura, XV sec.



著作権処理の都合で、  
この場所に挿入されていた  
写真を省略させていただきます。

# *Decameron* (1349-51)

人間的commedia



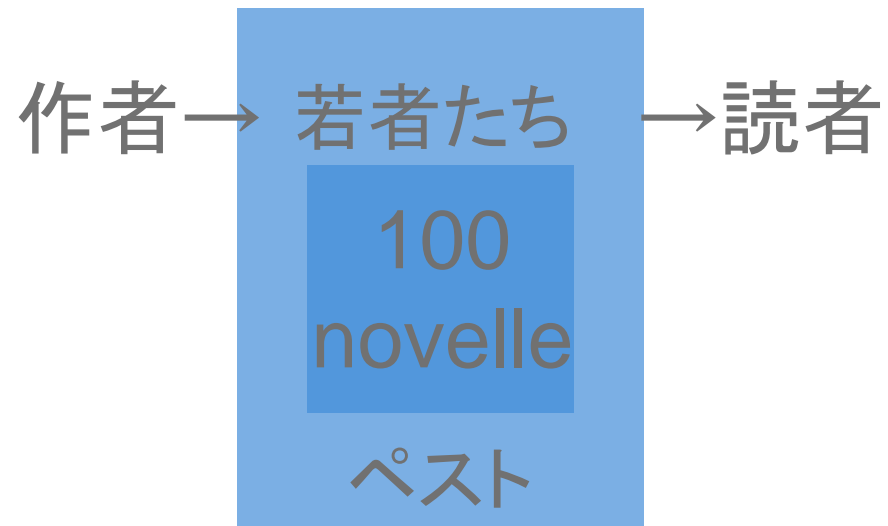
Hamilton 90

## 序言 Proemio— 苦しむ人への共感と「愛」

- 「苦悩するたちに同情することは、人間的なことです」
- 「愛こそは、私たちをくびきから解放してくれ、婦人たちの喜びに仕えることをゆるしてくれました」

# *Decameron* の構造

- 「枠物語」  
ペスト



- 100のノヴェツラ 10日x10人

# 「杵物語」の「死」

- ペストの流行 1348年
- 病状のリアルな描写
- 「死」に直面した個人／共同体の心理、  
行動 無秩序と混沌

## 第一日 序 冒頭一死の描写 cfr.『神曲』

- 「この忌まわしい書き出しは、たとえば旅人にとって険しくそびえ立つ山のようなものにほかなりませんが、その向こうには美しく心地よい平野が横たわっていて、山の昇り降りが苦しいほど、旅人には大きな喜びを与えるものです」



# ペストの流行—人間の無力

- 「神の子の降誕から1348年目の年、イタリアでも最も美しく有名なフィレンツェの町に、恐ろしい悪疫が流行しました...それに対しては、あらゆる人間の知恵や見通しも役立たず、そのために指名された役人たちが町から多くの汚物を掃除したり、すべての病人が町に入るのを禁止したり、衛生のための様々な予防法が講じられたりしましたし、信仰深い人たちが恭しく神に祈りを捧げたり、祭列を作ったり、色々な手はずが取られました。が、何の役にもたちませんでした」

## 病状の分析的な描写

- 「ここでは、男も女も、病気の初期には鼠蹊部か腋の下に腫れ物ができて、林檎ぐらいあるいは卵ぐらいの大きさになり、大小はさまざまでも、一般に人々からガヴォッチョロと呼ばれました...その後、黒色または鉛色の斑点がたくさん現れ...それは死の兆候でありました」

## 感染

- 「その上、この疫病の猖獗がますますひどかったのは、接触により病人から健康な人へと感染させがちであったためでした。ちょうど火がその近くの乾燥したもののや、油に燃え移るように」

## 混沌一人間と動物の境

- 「...私の目を見たことですが...この疫病で死んだある貧乏な人のぼろが、道に捨てられていたところへ、二匹の豚が来て...鼻でいじりまわした後、歯でくわえてあちこち振り回していましたが、間もなく毒をもらったように、痙攣を起こして、引き裂いたその檻褸の上に倒れて死んでしまいました」

## 無秩序→人々の反応 節度

- 「中には節制の生活をして、過度なことを慎むのが病気にかからない最上作と考える人たちがいました...団結し他の人たちから離れ、病人のいない気持ちよい家に集い、美味しい食べ物と最良のワインを節度をもって摂りながら、すっかり肉体的な快樂は断ち...物語を聞くとか、音楽などの手近な愉しみだけで満足しました。」

## 無秩序→人々の反応 享楽主義

- 「他の人たちは、正反対に考えて、ワインをたくさん飲み、遊び場に出入りし、歌ったり、冗談を言ったりして楽しみ、すべて欲望の赴くままにして...それが第一の療法だと信じていました...いずれ長くはないと思いながら、命も所有物をも棄てて顧みなかったのです」

# 権威と規律の失墜、共同体の崩壊

- 「...人間の掟も神の掟も、執行し励行する人がいなくなって、その威信はひどく失墜してしまいました」
- 「市民が市民を避け、隣人同士を世話もせず、親戚同士がほとんど決して訪問し合わなかったなどは、問題外にしておきましょう...中でも最も恐ろしかったのは、父親、母親が、自分の子どもを、まるで自分たちの子ではないごとく、見舞いも看護もしないことでした」
- 「涙もろうそくも葬列もなく、死に行く人々に対して、山羊に対してでもそうするだろうというほども、構わない風にまでなりました」

# 「ことば」と「死」

- 10人の若者たち ミサで再会→郊外のヴィラでの疑似宮廷、回復される秩序
- 「語り合う」意味と「愉しみ」





# novelle 多様な「死」の描かれ方

- 教会的「制度」—告解、聖遺物、聖人信仰  
(セル・チャツペツレット 1-1)
- 「地獄」的光景と現世の恋人たち (ナスター  
ージョ V-8 )

- セル・チャツペツレット 1-1

- ボルゴニョーニで貸し付けた債券の取り立てを依頼された無類の「悪漢」
- 金貸業をしているフィレンツェ出身の二人兄弟のところに滞在一急病、臨終
- 埋葬や怨恨の心配→虚偽の告白→罪障消滅と祝福、聖者信仰

- 「さて、皆さんがお聞きの通り、セル・チェツパレツロ・ダ・プラートはこんな風に生き、こんな風に死に、聖者となりました...その一生は背徳と悪行に充ち...彼は天国より悪魔の手に渡るのが当然だったと思います...神は私たちが神の敵を神の味方だと思い、神と私どもの仲介に頼んでも、私たちのまちがいを問題とすることなく、私たちの信仰の誠実をくんで、真実の聖人を仲介に立てて祈願しているのと同様に、私たちの願いを聞き届けてくださるのです」

# ナスタージョ・デリ・オネスティ V-8



Sandro Botticelli

- ナスタージョ・デリ・オネスティ 1-1
  - ラヴェンナの若者、報われぬ恋の苦悩
  - 自殺の欲望と浪費→転地 キアッシ
  - 金曜日の松林 裸の女性と騎士の凄惨な光景
  - 一週間後の金曜日の昼食会→恋の成就

# novellaの世界観

- 空間イメージの水平的広がり  
cfr. 『神曲』の垂直軸
- 世俗的徳・能力 virtù「知」「雄弁」
- 「恋愛」—「性」
- 「生」と「死」の対象
- 女性読者のための「娯楽」としてのテキスト

# Decameronの位置づけ

- 様々な中世先行文化の継承（説教文学、宮廷恋愛詩、古典文化、東方の物語 etc）
- *epopea dei mercanti*「商人たちの叙事詩」  
*Boccaccio medievale*「中世人ボッカッチョ」  
(Vittore Branca)
- 近代小説、人文主義（ヒューマニズム）の先駆

# ボツカッチョ『デカメロン』

- 野上素一訳、岩波文庫
- 柏熊達夫訳、ちくま文庫
- 河島英昭訳、講談社文芸文庫